

令和4年度(2022年度)第2回北海道農業・農村振興審議会 議事概要

- 1 日時 令和5年1月30日(月)13:25～16:00
- 2 場所 ANAクラウンプラザホテル札幌 3階 鳳
- 3 正副会長選任
 - ・会長に近藤委員、副会長に園田委員を選任

4 議題

○報告事項

(1) 新たな農地施策の推進について

- ・資料1-1～3により説明

【委員からの意見等】

- ・資料に「意欲的な担い手が多く」と担い手の説明があったが、どのような根拠資料を用いているのか。

(2) 北海道農村地域産業導入基本計画の変更について

- ・資料2-1～3により説明

(3) みどりの食料システム法に関する北海道基本計画の策定について

- ・資料3-1～2により説明

(4) 地域農業・農村の「めざす姿」の取組状況について

- ・資料4により説明

○意見聴取

(1) 「食料・農業・農村基本法」の見直しについて

- ・資料5-1～2により説明

【委員からの意見】

- ・1999年に現基本法が出来た当時は、日本は豊かであり、それなりに購買力もあったが、国際情勢が大きく変わり、中国、インドといった大国が相当力をつけており、日本は食料の購買力を保てるのかが問題となってきた。

- ・日本は国内生産の増大を基本に、備蓄と輸入を適切に組み合わせることで食料を確保することが基本であり、日本以外の国々が国際市場に参入してくる中でも、安定的に食料を輸入できるのかが不安。

- ・とうもろこしなどの輸入穀物をすべて国産で置き換えるとしたら、今の農地面積の2.1倍の農地が新たに必要となり、現在輸入している食料をすべて国産に置き換えることは現実的ではない。

- ・食料生産のための安定的な基盤確保と、農業生産あるいは農業経営の不安定性への対処が大きな課題。

- ・北海道農業にとっての懸念材料は、世界の人口が増加傾向にあり、しかも、経済発展とともに食料需要が一層増加すると予測される中で、生産基盤が縮小している。

- ・今の農地や労働力の減少が続くと、米・小麦を中心とした作付けを考えた場合に、

一人当たり 1800kcal のエネルギーしか供給出来ない。国民を養うのに必要な最低限の生産基盤を確保・維持することが、我が国の農業や北海道農業において必要になる。

- ・大規模な専業農家が多い北海道農業において、価格の低下による離農で、地域も大きな影響を受け、優れた農業技術を習得した基幹的担い手が、不安定性に対処できずに離農となれば、北海道農業にとって大きな損失となる。

- ・スマート農業などの技術開発や農地、用排水施設の整備保全を計画的に進めることを基本法に明記すること。

- ・国に対し、農業基盤整備の予算の確保・拡充やスマート農業の実装に向けた取組の加速、コスト低減の取組などの要望活動を継続するとともに、道内の企業・団体などとも連携して、スマート農業の実装に向けた活動も継続してほしい。

- ・AIを活用したスマート農業など、高度化した農業技術が進んでいくため、高度な知識を有した人材の育成が必要。

- ・農業を担いたい若者は確実にいることも確かであり、教育機関と連携することで、北海道農業を担う人材を確保し、高度な農業技術の展開を進めることが必要。

- ・農家戸数の減少や水田の畑地化が進むことを踏まえ、用排水施設の保全・管理を守ることを基本法に位置すること。

を基本法に位置すること。

- ・防災・減災、農村地域の強靱化対策を着実に推進するよう、基本法に明記すること。

- ・食料・農業・農村基本計画の食料自給率等の実現について検証を行い、検証結果を踏まえた基本法を策定すること。

- ・国民理解の醸成を図り、生産コストの増大分について、価格転嫁できる仕組みを実現すること。

- ・転換期を向かえ、これからも北海道で農業が出来るような農産物の価格形成がされる具体的な施策をお願いしたい。

- ・食料の安定供給を考えると、農業生産の不安定性への対処や調整コストの負担のあり方の議論が必要。

- ・一時期の価格のブレによって、人材が農業を離れることがあってはならない。持続的な土地利用においても、安定した畑作物の価格体系、輪作体系を持続できる農産物の価格バランスが絶対に必要。

- ・今後、1戸当たりの生産面積、経営面積は増え、社会情勢の影響を直接受けて、短期的に経営が悪化することも考えられ、経営規模の増加に対して迅速な対応が求められる。

- ・生活条件が整っていなければ、若い担い手も確保できないのが現実。

- ・農業の担い手に将来の夢を持ってというのが、私達も国に翻弄されて農業経営をしてきた。基本法に書かれていても上手くいかないのが現状。

- ・農業の担い手が将来展望を描き、創意工夫をもって営農を継続できるように、予期せぬ需給変動や生産環境の変化を緩和するための制度や仕組みを整備すべき。

- ・「食料・飼料の安定生産と環境負荷軽減の両立」を図りながら、再生産可能な農業所得を確保する持続可能な北海道農業を実現すること。

- ・環境への負荷を軽減する取組として「みどりの食料システム戦略」の推進や、「ゼロカーボン北海道」の実現も並行して進めていかなければならないが、生産性を維持しながら環境との調和を図ることは、難しいかじ取りが必要となる。
- ・食料の生産基盤である農地、人材を確保していく事が基本で、経営が安定しているからこそSDGsも達成できる。基本法の具体的施策が必要。
- ・国内生産は、できるだけ環境に負荷をかけないで生産することが求められ、温室効果ガスの削減や地球温暖化、気候変動などのリスクにも対処する必要があり、農業生産そのものに制約がかかってくる。
- ・北海道の立ち位置として、力強いメッセージと同時に具体的な政策を出してほしい。
- ・道の基本法の見直しに向けた意見に描かれた目標に向け、どのような具体策を示していくのかが一番大事。
- ・ミニマムアクセス米や、酪農業では牛肉などの関税の撤廃などで、交付金も減り、お米や備蓄米も余っていく状況もあるのではないかな。
- ・肥料や農薬など価格高騰となっているが、このままでは、農家は皆廃業し、国内に生産の農業者がいなくなる。
- ・道がどのように日本の農業を守っていくのか、私達、生産者は期待している。
- ・小豆と競合する大豆について、価格差があり小豆に付加価値を付けることが大切。
- ・いも、豆、ビート、小麦の輪作体系が崩れないように強い生産方法を確立し、良質な食料が安定的に供給され、食料自給率を高めることが必要。
- ・遺伝子組換え制度が23年4月に改正される。消費者は、作物や種子の表示のみが頼りであり、今後も、不正表示等がないように国は厳しく表示義務を徹底してほしい。
- ・北海道は日本国内の食を支えると思っていたが、本州の方はそう思っていないと感じている。もっと評価されるよう話し合いを進めたら良いのではないかな。
- ・化学肥料が高騰していることや環境の問題などから、新しい環境面も考えた肥料やクリーンエネルギーの研究などについて、聞いてみたい。
- ・意欲的な農業の担い手が多いという説明があったが、めざす姿の渡島・檜山地域の現状と課題で、高齢化と後継者不足により大量離農の危険とか、雇用を募集しても申し込みがない状況との記載に矛盾を感じる。
- ・地域おこし協力隊でも皆が皆、土地に根ざす訳ではなく辞める方が沢山いる。よそ者をよそ者のままではなくて、どうやったら育成していけるのか、この大切な人材がどうしたら根付かせていけるのか、愛着を形成させる教育が必要。
- ・農業側から小学校へ教育に対して、アプローチしていくような試みがない。子どもの頃から教育することで、初めて農村回帰が根づくのではないかな。
- ・第6期の推進計画では、多様な担い手に加えて、パート、短期の雇用、外国人を多様な人材に位置づけたが、国には、労働力の確保や道独自の研修制度の後押をしてほしいと思う。
- ・「女性の参画の促進」の記載に関して、女性の参画があまり感じられない。参画は、ただ居るだけではなく、意思決定のプロセスの場に居てこそ意見が尊重される。ここをもう少し拡大して捉えてほしい。
- ・高齢農業者の活動促進は、生きがいという、健康を担保しながらのところを、もう

少し尊重してほしい。

- ・道と我々自治体が、情報交換をしながら、地域の生産者の声に具体的に応えていけないと感じた。
- ・乳製品の消費（乳製品に限らないが）について、北海道としては、都府県との連携を考えてほしい。
- ・消費に協力してくれる地元の消費者の方達がいるということを入り、これからも生産に努力してほしい。
- ・遊休農地がほとんど無い北海道において、道産の小麦、大豆、子実用とうもろこしを増産するには、他の農作物とのバランスを考慮した上で、収量の確保や効率的な輪作体系の強化にしっかりと取り組んでほしい。
- ・北海道は、地域によって色々な特色があり、有機資源でも特色がある物を積極的に活用することで、海外での評価と輸出促進につながっていくのではないかと考える。
- ・海外依存度が高い小麦、大豆、子実用とうもろこしの長期的な生産・需要拡大などの取組については、食料供給基地の北海道でも、他府県に先んじて、オール北海道で取り組むべき政策と思う。
- ・「食料の安定供給の確保」は大きな柱で、食料の安全保障の基本となる「構造転換」は、非常に重要なキーワード。
- ・乳牛は資本ストックであり、ストックの調整には時間がかかる。これは酪農のみに限らず農業一般の宿命であり、このことを前提に政策を組み立てる必要がある。
- ・地域と農業生産性との関係を掘り下げて分析する必要がある。
- ・北海道農業・農村振興審議会としても、国に対し意見を上げていけたらと考える。
- ・十勝は小豆を機械で刈って収穫しているが、名寄は季節柄、秋の天気が悪いため、豆の乾燥に凄く手間が掛かる。名寄では、乾燥が悪くて、断念せざるを得ない。地域によって作りづらい穀物であることを、皆さんの参考として発言。

以上